存在

鶴橋ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
存在

【Ｎコード】
Ｎ９０４５Ｂ

【作者名】
鶴橋ユウ

【あらすじ】
ルーディが拐われた後の物語。ライナス中心のＤＸ↑ライナスな話しです。自分の気持ちに気付きつつも認められない…そんな少し切ないストーリーとなっています。

いつも無表情で
何を考えてるのかわからない

そんな事
別にどうでも良かった

腕の竜創さえ無事なら
どうでもよかったはずだった

『ともだち…ができたなくしたくない』

哀しい事を
ぽつりと零す…

DXー…

お願いだ…
お願いだから
どうか…

《存在》

親父に啖呵を切ってから数日たったある日のこと、ライナスは寮を一望できる天馬の像の前に座り込んでいた。
崖の下に広がる寮をぼんやりと眺め、風の囁きを横流しで聞く。
『とばっちりでダチを殺しかけたんだぞ！！』

（…ダチ？）

自分で吐き出した言葉に疑問を抱く。
（何故俺はあいつなんかの為に必死だったんだ…？）
ＤＸに近付いた理由は単純で、竜創が欲しい、ただそれだけのこと…。
特別な感情など抱く訳もなく、これからも変わる事の無いものだと思っていた。
…思っていた筈だった

一陣の風が突風となり、木々を叩き付ける。それを横目で見ながらライナスはまた、物思いにふける。

（ＤＸはいつも無表情で何を考えているのかわからない。
…だが、あいつは自分を犠牲にしてまで他人を助けようとしていた。
あの時…ルーディがさらわれたときも、自分に敵意が向くように仕向けて…。

ＤＸはバカだ。
他人の事には人一倍敏感なくせに、自分の事は全てを隠そうとしている。体に…心に傷を負っても…。）
ライナスは無言で頭に手をやり、思いっ切りガジガジと掻き始め

た。
（…側に居るだけで、ＤＸの事が少しずつわかってきてしまった。
…知りなくなんかなかったのに。
こんなもの…。）

足を投げ出した座り方から変えることなく、ただ遠くを見つめる。
変わる事の無い景色を眺めながら、その景色と相反する心の変換について、ぼんやりと考える。
（…俺はこの気持ちを知っている。今までに感じたものよりも遥かに大きく、切ない…。）
瞼を閉じ、風の囁きを感じとる。
（この気持ちを認めてしまえば、どんなに楽だろうか…？）
頭の内によぎった一つの問い。
それを書き消すほど大きな存在。一つの答。
「…認めれる訳がねぇ。」
静かに瞳を開らき、辛そうな表情をしながら押し込めていた物を吐き捨てるかのように、ぽつりと呟く。
どうしても認められない理由があった。

「…竜創。」
自然と出てきた一つの言葉。
そう…、これが全てを物語っている。

竜創を手に入れるのが全ての目的。
ＤＸの側にいる理由も全てはその為。
…だが、竜創を手に入れるためにはＤＸを傷付けなければならないのだ。
腕を切り落とし

見ず知らずの人の手へと…

この気持ちを認めたら？受け入れたら？
…そんな事する自分を許せなくなるだけだ。

傷付けたくない…

大切にしたい

…でも、竜創は必要だ。竜創が無くてはダメだ！

だって…
唯一ＤＸと自分を繋ぐ鎖だから…

矛盾している…

分かっている！？

…それでもー…

風は強さを増すばかりで、ライナスの想いをいっそ掻き立てる。

…どうしてこんなにも大きな存在になってしまったのだろうか？

隣を歩く事でさえも許されないと知っていたはずなのに…

これ以上俺の中で大きな
「存在」にならないでくれ

お前が俺の事を
「友」と呼ぶなら
俺はお前の元を離れよう

この気持ちは
俺とお前が出会った時から許されないものだったんだ…

俺は認めない
認められない…

…だからー…

DXー…
…お願いだ

お願いだから
どうか…

ガサッー…

周りに対して注意散漫になっていたライナスの背後から、不自然な葉と葉の擦れる音が響き渡る。

とっさに振り向いて見るとそこにはー…、ＤＸの姿があった。
今まで考えていた相手の突然の登場に、ライナスは息を飲む。
「…ディ…ＤＸ……？」
ＤＸの事をずっと考えていたせいか、本物か幻かの区別もあやふやになり、つい本人か聞いてしまう。
「？
どうしたんだ？ライナス。」
…返事をした。本物である。
あまりにも突然の出来事に驚きを隠せず、慌てていつもの態度に戻そうとする。
「ＤＸ、どうしたんだ？こんなとこに…何か用でもあるのか？」
ライナスはとにかく動揺を隠す為、顔に笑顔を造り、話しをそらしてみた。
するとＤＸは目をキョトンとさせ、ライナスの質問に答えた。
「お前を捜してたんだ。」
…ーゴンッ
意外な答えに像のところで、頭をぶつけしまった。
動揺を隠すはずが、動揺を引き寄せてしまったのだ。
「な…なんっ…」
いつもと違うライナスの様子に疑問を抱きながら、ＤＸは話しを進める。
「ルーディから聞いたんだ。ライナスがお父さんに頼んで、俺らを襲った奴等に、もう手を出させないように話を付けてくれたんだろ？」
意外な解答に目を丸くさせる。
（ルーディのやつ、勝手にペラペラしゃべりやがって…。）
動揺した理由を体よく、ルーディに押しつける。
ライナスはＤＸの顔を見ないで、さっきぶつけた頭を手で押えながら、ルーディをどうしてくれようか…と考えていた。
ＤＸは眼を細め、照れた様に少し下を俯いた。その姿はどこか、

微笑んだように見える。
ＤＸは戸惑いながらライナスに囁くようにぽつりと呟く。

「…ありがとう」

風が吹き、優しく頬を撫でてゆく。
心の中で何かが変わる。気持ちが揺れ動いているのがわかる…。
目を細め、心から押し流される何かを塞き止めるかのように、口をつぐんだ。
静かに、そっと瞳を閉じる。
あぁ…

ＤＸ…
お願いだから
どうか…

これ以上愛しい気持ちにさせないでくれ…

（後書き）

マイナーですみません（｜｜；一年ほど前に友達に頼まれて書いたものを、少し修正して載せてみました。まだ小説に書きなれてないので、お見苦しい点が多々あると思います…が、そんな小説を最後まで読んでくだって、ありがとうございます＼（゜∀゜）／感想を書いて下さったら更に嬉しいです！
これからも、詩や小説をちょくちょくと載せていきたいと思ってるので、よろしくですｍ（＿＿）ｍ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9045b/

存在

2011年3月10日20時30分発行